

国宝

赤糸威大鎧(梅鶯飾)

この大鎧は春日大社に奉納するため作られたもので、戦場で着用することは想定されていなかった。漆塗りの鉄と革の札を絹の威糸で繋いで出来ている。威糸はかつて真紅であったが、染料は何世紀ものうちに徐々に色褪せていった。

この甲冑の人目を引く兜は、最も注目すべき特徴のひとつである。長い角のような兜の前立て（鍬形）は、水晶でできた鋭い目を持つ守護獅子の頭から突き出ている。高くそびえる飾りには細かな文字が刻まれており、その模様は鳥の翼か龍の鱗を思わせるが、おそらくは鳩尾板に描かれた龍の文様と一致している。兜の両側には一对の吹返しを外に向かって広がっている。一般的には横向きに広がるどころ、この兜の吹返しでは風神と雷神の絵巻と、金色の梅の花の複雑な彫りを際立たせるためにほぼ縦に立っている。

甲冑の装飾をよく見ると、細かい装飾が無数に施されていることがわかる。梅の花と鶯の組み合わせは伝統的な早春のシンボルであり、冬の厳しさの後に訪れる繁栄を連想させるモチーフでもある。花の間には、見つけにくいですが、虻、蓑虫、蜘蛛などの小さな生き物の高肉彫りが隠

れている。この装飾の象徴性は定かではないが、1300年代にはこのような題材が武具の装飾にふさわしいと考えられていたことは注目に値する。